

簡易版 TP

食物栄養学科
准教授 清澤朋子

1. 教育の責任

担当科目の領域は、主に「食べ物を中心とした科目」と「人と食べ物をつなぐ科目」である。栄養士課程「食品と衛生」区分やフードサイエンティスト課程、フードスペシャリスト課程の一部を担当している。主な担当科目を以下に示す。

領域	科目名	形態	開設学年 (単位数)	卒業 必修	栄養士	FSP	FSC
食べ物を中心とした科目	食品学Ⅱ	講義	1年後期(2)	○	○	○	○
	食品学実験	実習	1年後期(1)		○	○	○
	食品衛生学	講義	2年前期(2)		○	○	○
	食品衛生学実験	実習	2年前期(1)		○	○	○
	食品鑑別論	講義	2年後期(2)			○	
人と食べ物をつなぐ科目	食品機能論	講義	2年前期(2)				○
	食の安全性	講義	2年後期(2)				○
	食品の官能評価と鑑別演習	演習	2年後期(1)			○	○

○は必修科目、FSPはフードスペシャリスト課程、FSCはフードサイエンティスト課程

その他、アカデミックスキルズ科目（1年前期）、特別研究の指導も担当した。また、学習支援のアドバイザーとして、前期はとくにGPAの低い学生やリメディアル講座を受講できない学生の学習相談等にも対応した。

2. 教育の理念と目的

「根拠に基づきながらも対象者によりそった栄養の指導と給食の提供をできる栄養士」となるためには、（1）自ら学び続ける力（2）修得した知識・技術を実際に役立てる力（3）他者と協力する力が重要だと考えている。私は、学生が卒業後、絶えず変化する社会において自立して生きていくことができるよう、これらの能力を備えた学生の育成に貢献したいと考えている。

そこで、卒業後も専門職および一消費者として自ら学び続けていくことができるようになるために、まずは学生が、学ぶ楽しさや学びの意義に気づき、学び方を身に付けられるような授業を目指して実践している。また、短大で修得する知識や技術は、各々がしっかり理解し身に付けることが基本であるが、さらに、学んだ成果を用いて、他者と協力しながら社会に役立てていかなければならない。そのため、授業での学びを社会の繋がりと関連付けて考えることができるような授業の工夫と、チームで働く力が身に付くような授業方法を取り入れるようにしている。

3. 教育の方法

（1）自ら学び続ける力を育てる工夫

学生が学ぶ楽しさや学びの意義に気付くことができるように、はじめに授業の目的・意義をしっかりと伝え、興味関心を高めるような説明や体験の機会（事例や写真、図、実物の紹介）を設けるようにした。とくに卒業後の進路との関わりが想像しにくいような実験科目については、身近な食材やテーマを設定し興味を惹く説明ができるように努め、学生の意欲、関心を高めることで、理解度の向上につなげようと考えた。

また、他者の学び方を真似て取り入れることができるように、優秀な学生のノートのまとめ方や考え方を見本として示し、全体に紹介するようにした。授業の最初に前回までの範囲の小テストを実施したり、復習の課題や報告書に学びのふり返りを記入させたりして、授業時間外の自主的な学修を促す工夫や、授業内容を理解して身に付けられるような工夫を試みた。さらに授業では、卒業後でも自ら調べ学ぶための情報源を紹介し、実際に体験する課題を課している。

（２）修得した知識・技術を実際に役立てる力を育てる工夫

担当する分野は実践のための基礎的な科目も多いため、まずは授業での学びを他科目や日常生活、社会の繋がりと関連付けて考えることができるようになることを到達目標に掲げ、（１）での事例紹介だけでなく、意識的に関連付ける練習として授業の最後に自分の考えを記入させたり、実験の結果を講義で学ぶ内容と関連づけて考えさせレポートで報告させたりする機会を設けた。考えることが苦手な学生のために、他の人がどのように考えたのかを全体で共有したりして、授業内容をどのように活用するのか自ら積極的に考えられるように意識付けを行った。

（３）他者と協力する力を育てる工夫

実験や演習では、さまざまな人と作業をする機会を作り、他者と協力する体験を多く準備し、チームで働く力が身に付くような授業を試みた。講義科目においても、個人の課題だけでなくグループ作業を導入し、Microsoft 365 を用いて共有したり共同で作成したりする方法や、グループ内で質問し合い教え合う方法などを多用し、気付きや学びが増える体験ができるように準備した。

さらに今年度は、学生の主体的な学びを促すため、授業では関連付けて考えることやグループ活動に取り組む姿勢、その意義等について、あらかじめしっかり説明することを心掛けた。

4. 評価と成果

授業評価アンケートの結果は、食物栄養学科各学年の履修科目の平均と比較した。「一週間あたりの平均勉強時間」については30分未満の割合が平均よりも少ないこと、「意欲的な受講」や「自ら学ぶ意欲」については平均に近い評価が得られたことから、学生の学修意欲の向上に役立ったのではないかと考えている。しかし、履修者が多い科目では「内容理解」の評価が低めものや学生の成績分布に偏りが見られる（C判定あるいはS判定が多い）科目もあることから、今後は厳格な成績評価と、意欲だけでなく受講者全体の理解度の向上を図り、自ら学び続ける基礎力の育成に努めたい。

学生の提出物では、他教科での学びを実際に活用していた学生、他者と協力することの意義を体験した学生からの以下のようなコメントが確認できた。

- 結果の伝え方、スライドの作り方、情報の利用等に今まで学んできたことを活かすことができた
- この授業のおかげで人と話し合い協力し合って何かを作り上げることの大切さを学ぶことができた
- 私が質問した「第三者の悪をどう排除するか」に対する「AI化」という答えに、私は会社側が従業員の話を聞く機会などを作り不満やストレスをなくすという策を考えていたので、その意見は根本的な解決になっていないのではないかと考えた。しかし先生はそれに対し解決になっていると答えた。この時にこうやって意見を交えることで新たな考え方をすることができるんだなあと思い質問してよかったなと思った
- グループでひとつの課題を仕上げたり、発表の準備をしたりするのは個人的に苦手で、絶対サボる人が出てくるし、そういう人の仕事まで自分がやるのは正直面倒だし嫌だったけど、やる事が多かった分理解できた事が増えたとし、自分の知識として得るものが増えて2年間の中で得たなあと思えるようにしました
これまでもグループ活動における個人負担の偏りが課題だったが、今年度 Microsoft 365 で共同作業が可能になったことから、もっと効果的に授業に活用することで、学生間での学びの共有や学生の事前準備の負担軽減を図っていきたい。
- 身近にあるものを、詳しく調べるとどんどん楽しくなって行って、友達とそのことについて話し合ったことがとても印象に残っている

しかし受講者全体の評価である授業評価アンケートでは、「課題発見・探求力」が平均に満たない科目もあり、今後は課題設定等をさらに工夫し、様々な形態の科目であっても自ら考え調べ学ぶ力の向上に努めていきたい。